

昔むかし、おろかな導師と十二人のおろかな弟子が、巡礼をしていました。あるとき、導師と弟子たちは、川を渡ることになりました。導師はいいました。

「この川は、油断がならない。今までたくさんの人間を飲みこんできたのだ。川が眠ってしまうまで待つて、渡ることしよう」

導師と弟子たちは、河原でたき火をして待つことにしました。しばらくすると、導師がひとりの弟子にいいました。

「川がもう眠ったかどうか見てきておくれ」

弟子は、たき火の中から薪を一本引き抜いて川まで行きました。そして、燃えているその薪のはしをそつと川にひたしました。そのとたん、川はシューシューいってけむりをあげました。

弟子は、びっくりして、あわてて導師の所にかげもどつていいました。

「先生。渡るときではありません。川は起きています。さわつたとたんに、毒へびみたいにシューシューいって、けむりをあげました。もう少しでわたしを飲みこむところでした。やつとので逃げて来ました」

導師は、

「おまえが逃げる事ができて、よかった。川が眠ってしまうまで、あちらの森で待つことにしよう」といいました。そして、みんなは、河原からはなれて、森の中で休みました。

みんなが輪になって休んでいると、弟子のひとりが、こんな話をしました。

「私のおじいさんは、えらい商人だったんですがね。あるとき、らばに塩のふくろを積んでこの川を渡っていたんです。夏だったので、泳いだり、らばを洗ったりしながら、渡っていきました。そしたら、この恐ろしい川は何をしたと思います。向こう岸に着いてみると、川は塩をぜんぶ食べてしまっていたんです。ふくろにはあなも開いていなかったのに、中の塩をぜんぶ取ってしまったんですよ。あいつは、悪党です。わたしたちは、この森まではなれていてよかったと思います」

それからみんなは眠り、朝早く目を覚ましました。

導師が、ひとりの弟子に、

「川が眠っているかどうか見てきておくれ」といいました。弟子は、きのうの薪を持って川まで行きました。そして、薪のはしをそつと川にひたしました。すると、こんどは、川はシューシューいってこともなく、けむりをあげることもありませんでした。弟子は、走って帰っていいました。

「先生。渡るときです。川はぐつすり眠っています。急いで出かけましょう」

導師と十二人の弟子たちは、手を取り合って、用心深く川に足をふみ入れました。そして、川が目を覚まさないように、こわごわ、ふるえながら、ひと足ひと足、川を渡りました。

ようやく向こう岸に着いて、ほっとしていると、ひとりの弟子がいました。

「先生。わたしたち全員、渡りましたか。確かですか。この川は、この上なく油断のならない川です。何人いるか、数えてみましょう」

弟子は、ひとりひとり数えましたが、自分を数えるのをわすれていました。弟子は、「そら、先生を入れて十二人しかいません。川が、ひとり飲みこんでしまいました」とさげびました。導師は、別の弟子に数え直すようにいいました。ところが、この弟子も、自分を数えるのをわすれていました。また別の弟子が数えましたが、やはり、ひとり足りません。そこで、こんどは、導師が数えました。そして、悲しそうにいいました。

「まちがいない。十二人だ。ひとり、いなくなってしまう」

導師と弟子たちは、大声で泣きわめきました。けれども、だれがいなくなったのかは、分かりませんでした。

みんなは、川に向かってさげびました。

「この悪党！人殺し！なんてことをしてくれただんだ！おまえは、私たちの兄弟を食べてしまった！おまえなんか干上がってしまえ！」

こうしてののしっている、男が通りがかって、いったいどうしたのかとたずねました。みんなは、自分たちは十三人いたけれども、川でひとりなくなると、とことん数えたけれども、今は十二人しかいないと話しました。すると、男がいいました。

「わたしがここに來あわせてよかったですね。わたしは、まほうを知っています。そのいなくなつた人をとり返してあげましょう。でも、少しお金がかかりますよ」

導師はすぐさまいました。

「弟子をとり返してくださいなら、私たちの持っているものを何でもさしあげましょう」

導師と弟子たちは、旅のためのお金をぜんぶ出して、男にわたしました。すると、男は、「では、牛のふんをかごにいっぱい集めてください」といいました。

みんなは、町じゅう走りまわって、牛のふんを集めてきました。男は、牛のふんを板のように長く平らに並べるようにいって、みんなをその前に一列に立たせました。それから、「さあ、腰をかがめて、ふんの中に鼻を押しつけてください」といいました。みんなは、いっせいに、牛のふんに鼻を押しつけました。男はいいました。

「では、立ち上がって、みなさんが牛のふんに作った鼻のくぼみを数えて、何人いるか、いってください」

みんなは、もがきながら立ち上がり、数えました。牛のふんには、まちがいなくくぼみが十三ありました。みんなはびつくりし、よろこんで飛びあがっていました。

「また十三人になった！いなくなつたひとりもどつてきた！わたしたちは、みんなここにいる！まほう使いさん、ありがとう！」

原話：『インドの民話』A・K・ラーマーヌジャン編／中島健訳／青土社

再話：村上郁